書評　クラウディア・ヴァーホーヴェン著
『最初のテロリスト　カラコーゾフ――ドストエフスキーに霊感を与えた男』
（宮内悠介訳、筑摩書房、2020 年、379＋vii頁）

田村 太

1. 本書の内容

1866 年 4 月 4 日の 15 時 45 分、ペテルブルグ。午後の散歩を終えたアレクサンドル二世が「夏の公園」から大通りへ出たとき、一人の青年が二連式の火打ち石銃を引き抜き、皇帝に向けて発砲した。弾丸は皇帝に命中せず、青年はただちに捕らえられた。彼の名はドミートリー・カラコーゾフ（Дмитрий Владимирович Каракозов, 1840-1866）。自由主義的な「大改革」が進んでいたロシア社会において、このカラコーゾフ事件は同時代人から様々な解釈を引きだした。これは個の狂気による犯行なのか、それとも何か巨大な政治的陰謀の一部なのか。多くの謎を残したまま、同年 9 月 3 日にカラコーゾフは絞首台に消えることになった。

本書『最初のテロリスト　カラコーゾフ――ドストエフスキーに霊感を与えた男』が中心に据えるのは、この皇帝暗殺未遂事件である。具体的には、それが当時のロシア社会においてどのように受容されたかについて、様々な史料に基づいて考証したものである。著者のクラウディア・ヴァーホーヴェン（Claudia Verhoeven, 1972-　）はコーネル大学の歴史学科の准教授であり、ロシアやヨーロッパ諸国における革命運動やテロリズムの文化史を専門としている。

本書の骨格をなすのは、ヴァーホーヴェンが 2004 年にカリフォルニア大学に提出した博士学位論文 April 4, 1866: the Karakozov Case and the making of revolutionary terrorism（1866 年 4 月 4 日――カラコーゾフ事件と革命的テロリズムの創出）であり、[1] 同論文は 2009 年にコーネル大学から The Odd Man Karakozov: Imperial Russia, Modernity, and the Birth of Terrorism（奇人カラコーゾフ――ロシア帝国・近代性・テロリズムの誕生）という表題で書籍化された。[2] 本書はその全訳である。

本書は序文と結文のほか、全 7 章から構成されている。末尾には人物名のリストと先行研究をまとめた「附記」が 3 つ収録されており、本書の内容理解に役立つ。最初に本書の内容を軽く俯瞰しておくと、第一章から第三章までは国家・社会・メディアという視点からカラコーゾフ事件がどのように受容されたかを明らかにし、第四章はフィクションと現実との同時並行性を論じ、第五章から第七章まではカラコーゾフの衣服・身体・精神に着目しながら彼の内面を再構成している。以下、各章の内容を整理したのち、本書の意義と評者の所見を述べていきたい。

---

[1] Claudia Verhoeven, April 4, 1866: the Karakozov Case and the making of revolutionary terrorism. Ph.D. thesis University of California, Los Angeles, 2004.
[2] Claudia Verhoeven, *The Odd Man Karakozov: Imperial Russia, Modernity, and the Birth of Terrorism*, Ithaca and London: Cornell University Press, 2009.

序文では、本書の主人公カラコーゾフと彼が起こした事件の概要と後世の評価、そして著者の立場が示される。既存の研究では、失敗に終わったカラコーゾフの行動は時期尚早の凶行と見なされ、革命運動とは無縁の「奇人」として語られる傾向にあった。このような評価とは反対に、ヴァーホーヴェンはカラコーゾフこそが「全体の核心」を内に抱いた人物であると述べる。すなわち、カラコーゾフ事件とはテロリズムの誕生の物語であり、テロリストという新たな近代的な政治主体の出現であって、それは近代の諸条件（司法制度、大衆小説、医療、都市化、群衆など）によって初めて実現が可能になったという。これが本書を貫く基本的な主張であり、このような主張に沿って以下の章では各論が展開される。

第一章「カラコーゾフ事件の記録から――事実上のテロリズムの誕生」では、大改革以降のロシア帝国の司法制度において、事件がどのように処理されたかについて論じられている。前代未聞の出来事はまず「陰謀」として理解された。すなわち、犯人の背後には「地獄」という名前の急進的な秘密結社が存在しており、国際的なネットワークを張り巡らしているというものだ。実際に「地獄」が存在したのか否かが未解明のまま、保守的な捜査委員会によって編纂された報告書、噛み合わない口頭尋問、法の再制定を通じて、「陰謀」という考えが構築され実体化していく過程が示される。

第二章「“リアル版” ラフメートフ――カラコーゾフ以後の革命家像（あるいは『何をなすべきか』受容史の一エピソード）」では、当時のメディア（新聞、雑誌、小説）がどのようにカラコーゾフ事件を扱ったかについて論じられている。これまでの見解では、行為よりも先に言葉があったとされた。すなわち、カラコーゾフのような「目的のためには手段を選ばない」革命家・陰謀家の模範として、19世紀ロシアの批評家・作家ニコライ・チェルヌイシェフスキー（Николай Гаврилович Чернышевский, 1828-1889）の長編小説『何をなすべきか』（Что делать?, 1863）に登場する革命家ラフメートフがすでに存在した。カラコーゾフはこの小説で描かれた革命家像を模倣したにすぎないというわけだ。これに対して本章では、このような見方が事件後に遡及的に解釈されたものであり、例外的な事態を理解するために既存の文化的イメージ（ラフメートフのような革命家像、陰謀団としてのイエズス会）が持ち出されて、事件の源流として固定されていく経緯が論じられている。

第三章「『皇帝に捧げた命』――複製技術時代の皇帝殺し」では、カラコーゾフ事件がロシア社会においてどのように受容されたかについて論じられている。本章で主に取りあげられるのは、コミサーロフ（Осип Иванович Комиссаров, 1838-1892）というカラコーゾフの凶行から皇帝を救ったとされる人物である。不可解極まるカラコーゾフ事件を理解するために、平凡な農夫であったコミサーロフは「四月四日以降のロシアの激情の調整弁として利用された」（127 頁）。政府は皇帝と臣民の絆という神話を利用してコミサーロフを貴族に取り立て、マスコミは彼を祭りあげた。その結果、新聞・雑誌・写真・オペラといった様々なメディアを通じて、大量に複製された彼の表象がロシア帝国の隅々まで流通することになった。ヴァーホーヴェンは、ロシアで発生期にあった市場経済／消費

社会がコミサーロフを商品として消費し尽くしていく過程を描きながら、ロシアにおいて近代社会の諸条件が整備されつつあったこと、そしてメディア的表象としての「コミサーロフ」はその力の特殊な副作用であったことを提示する。

第四章「ラスコーリニコフとカラコーゾフ、「新しい言葉」の病因学」では、カラコーゾフ事件とドストエフスキー（Федор Михайлович Достоевский, 1821-1880）の長編小説『罪と罰』（Преступление и наказание, 1866）との同時並行性が作品の創作過程の検討と作品分析を通して論じられている。本章で何よりもまず印象深いのは、ラスコーリニコフ（24 歳）とカラコーゾフ（25 歳）の驚くほどの一致である。二人は大学で教育を受けた極貧の大学生であり、ともに気難しく、厭世的で、偏執的な「心気症患者」である。そして二人ともイデオロギー的な考えごとを紙に書きつける（論文「犯罪論」と声明文「労働者階級の友たちへ」）、その他色々。このようにフィクションと現実の同時並行性が提示されながら、カラコーゾフ事件が『罪と罰』に対してどのような影響を与えたかについて詳しい検証がなされている。『罪と罰』の構想の大部分は 1866 年の夏までに仕上がっていたが、事件のインパクトは作品のいくつかの章にも深刻な痕跡を残すことになった。興味深いことに、本章の主張によれば、ニヒリズムとテロリズムの結びつきはカラコーゾフ事件以前には想像不可能であったという。そのため、ラスコーリニコフのことを政治的陰謀家だと評する友人ラズミーヒンの考えの背景に、ヴァーホーヴェンはカラコーゾフ事件からの直接的な影響を見て取っている。

第五章「ラシャ外套――「一枚の外套には、なんとたくさんのものが入っているのだろう！」」では、犯行時のカラコーゾフが着ていた農民風のラシャ外套（アルミャーク、армяк）に着目して、ニヒリストや革命家のファッションの変遷が論じられている。1860 年代のニヒリストは旧来のマナーや行動様式から逸脱した服装・身振り・言動によって、貴族階級との「差異」を示そうとした。この時点では革命家は周囲から目立つ存在だが、「ヴ・ナロード」のような政治的な隠密行動を取る場合、この差異に「仮面」が初めて付けられた。それゆえ、みすぼらしいアルミャークは、カラコーゾフにとって都市の群衆の中に正体を隠すための仮面であり、「迷彩」であった。それ以降の革命家は差異の否定によって特徴づけられる。20 世紀初頭の社会革命党のテロリストによる町人の「変装」もそうした系譜に沿った身振りであることが明かされる。

第六章「「実例に基づくプロパガンダ」――ある検屍、または一八六六年四月四日の病理的起源」では、「実例に基づくプロパガンダ」というカラコーゾフのテロリズム理解をめぐって、彼の病歴を記録したカルテに基づきながら、テロリズムと病の関係が論じられている。既存の研究では、カラコーゾフを現実の物理的暴力へと駆り立てたのは自滅的な異常心理であり、「病んだ精神」（224 頁）であったとされた。これに対して、ヴァーホーヴェンは精神ではなく身体に着目する。彼女によれば、カラコーゾフという史上初のテロリストの身体は多くの病気におかされていた。身を切るような症状に悩まされながら、様々な診療所を訪れて身体の治癒法を探っていたとき、彼の頭にあったのは

「パレーズヌイ」（полезный）になるということであった。この言葉は「有益な、有用な」、あるいは「健康によい」という意味を帯びているが、このときカラコーゾフのなかでは自らの病気と皇帝殺しが結びついている。革命家として「有用である」ために、そしてロシアの健康を癒すために、彼は自分の病気を利用することに思い至ったのだ。それゆえ、カラコーゾフが「実例に基づくプロパガンダ」について供述した際、「すなわち、皇帝に対する犯罪であり、そして自分は、身体の状態のおかげで、その犯罪を実行できる」（253 頁）と説明することになった。このようにカラコーゾフの病歴を辿りながら、テロリズムが非理性的な精神ではなく病んだ身体から生まれたことが示されている。

第七章「皇帝殺しの首」では、カラコーゾフの回心という「事実」がどのようにして国家権力と教会関係者の間で形成されたかについて論じられている。根っからの無神論者であったカラコーゾフは収監中に宗教的感情が湧き起こり、ついに回心を遂げたとされる。この回心をめぐって、キーパーソンとなるのはポリサードフ（Василий Петрович Полисадов, 1815-1878）という名前の司祭である。ここで興味深いのは、ロシア帝国の刑事司法制度における司祭の政治的・宗教的立場である。自供を促す目的から、司祭による受刑者への「宗教的な説教」は大改革以降も継続されていた。カラコーゾフの説教担当になったポリサードフは、彼のような未知の敵を悔い改めさせるためには、説教に加えて「腹を割った雑談」が必要であると考えた。だが、カラコーゾフの不可解な精神を前にして、ポリサードフと国家権力の二者間で様々な駆け引きが交わされることになる。ヴァーホーヴェンは、ポリサードフの宗教的説教の技法や彼の書簡を読み解きながら、カラコーゾフの死刑前に交わされた両者の駆け引きを推測していく。

結文では、カラコーゾフ事件に潜伏していた政治的洞察について論じられている。序文でも述べられたように、ヴァーホーヴェンの主張は、テロリズムとは近代社会において初めて実現可能になった産物であるということだ。そのため、テロリズムは古代から存在した暴君殺しと異なっている。世界の再発明を急進的に模索するテロリストにとって、標的は王（個人）ではなく王権（政治システム）である。事実、カラコーゾフはアレクサンドル二世に請願する意志はなく、彼に代表される政体そのものを排除するつもりであった。それゆえ、暗殺の目的を聞かれたとき、カラコーゾフは「何もない」と答えるほかなかった。独裁者が繰り返し暗殺され、そのたびに別の独裁者に入れ替わること――権力とは空虚であるという政治的洞察をテロリストは示していたのである。

2. 本書の意義

評者の考えでは、本書は以下のような 2 つの意義をもっている。

第一に、カラコーゾフという、これまであまり顧みられることのなかった革命家を中心に据えて、様々な視点から史上初の皇帝暗殺未遂事件が及ぼしたインパクトを再構成した点である。

カラコーゾフの名前は日本でも一定程度知られているだろう。おそらくドストエフスキーを経由

して知ったという人が多いかもしれない。カラコーゾフ／カラマーゾフという名前の類似性、そして長編小説『カラマーゾフの兄弟』（Братья Карамазовы, 1879-1880）の続編において構想されていた皇帝暗殺といった逸話[3]から、同時代に起こったカラコーゾフ事件は読者の関心を集めてきた。ドストエフスキー研究者の亀山郁夫氏による解説書[4]や作家エドワード・ラジンスキー（Эдвард Радзинский, 1936- ）の歴史小説『アレクサンドル 2 世暗殺』（Александр II: жизнь и смерть, 2006）[5]などを読んで知見を深めた読者もいるだろう。だが、既存の文献ではカラコーゾフ事件は時代背景や「革命運動史」内の一エピソードであって、それが中心に据えられて様々な視座から論じられたことは、これまでほとんどなかった。[6] その意味で、カラコーゾフこそが「全体の核心を内にいだいた」人物であるとして、近代とテロリズムをめぐる議論の中心に据えた本書は新しいものであると言える。

また、当時のロシア社会においてまったく新しい現象であった「テロリズム」が人々に与えたインパクトをつぶさに復元した点においても、本書の特徴がある。ロシア史の基本的な理解に沿うと、カラコーゾフ事件は 2 つの点で重要な歴史的意味をもっている。ひとつは事件後にツァーリ政府の保守化を招いた点であり、いまひとつは後世の「革命運動」に決定的な影響を与えた点である。[7] カラコーゾフのテロリズムは、思想家アレクサンドル・ゲルツェン（Александр Иванович Герцен, 1812-1870）から容赦のない批判をうけた一方で、急進的な革命家に対して「実例と啓示」（296 頁）を与えた。そのため、カラコーゾフの名前は帝政期ロシアの「革命運動史」に関する研究書や論文のなかにたびたび登場し、テロリズムの先駆けとして評価されてきた。その意味で、カラコーゾフ事件をテロリズムの誕生として見ること自体に特に新しさはないが、本書の特筆すべきところは、それが「いかに」新しい現象であったかを検討した点にあるだろう。

第二の点として、本書がこれまでの「革命運動史」研究とは異なるアプローチを通して、カラコーゾフ事件を考証した点を挙げたい。ヴァーホーヴェンは、既存の研究がカラコーゾフ事件の核心をつかみ損ねていたこと批判しながら、「革命思想の発展」や「党派間の紛争」といった見慣れたカテ

---

[3] 評者はドストエフスキー研究に詳しくないが、本書の序文や第四章では、この逸話が一般に認められている事実であるかのように述べられている。ただし、証拠の乏しさから否定的な立場を示す研究者が少なくないことを、念のために付言しておきたい。詳しくは以下を参照。*Ветловская В. Е.* Примечания // *Достоевский Ф. М.* Полное собрание сочинений в 30 томах. Т. 15. Л.: Наука, 1976. С. 485-487.

[4] 亀山郁夫『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する』光文社新書、2007 年、170-185 頁、亀山郁夫『『罪と罰』ノート』平凡社新書、2009 年、44-45 頁などを参照。

[5] *Радзинский Э.С.* Александр II: жизнь и смерть. М.: АСТ, 2006. 邦訳：エドワード・ラジンスキー／望月哲男・久野康彦訳『アレクサンドル 2 世暗殺　上：ロシア・テロリズムの胎動』日本放送出版協会、2007 年。エドワード・ラジンスキー ／ 望月哲男・久野康彦訳『アレクサンドル 2 世暗殺　下：ドストエフスキーの死の謎』日本放送出版協会、2007 年。

[6] 例外的な研究として、下里俊行「カラコーゾフ事件とロシアの社会運動（一八六六年）」『一橋論叢』113 巻 2 号、1995 年、217-236 頁など。

[7] 田中陽児、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史体系 ロシア史 2：18～19 世紀』山川出版社、1994 年、227 頁参照。

ゴリーの「外部」に触れようと試みている。それゆえ、本書はテロリズムという不法にして例外的な暴力を、「あらかじめ計画された生産ライン――前衛（アヴァンギャルド）、流行（ア・ラ・モード）、普及（オ・クラウン）、大衆化、民衆運動、革命――の順に動く機械仕掛けの存在」（215 頁）の中に内蔵することを、きっぱりと回避している。当然、彼女が目を向ける史料も、思想家のテクストや革命党の綱領などではなく、思いもよらないようなユニークなものだ。それは、コミサーロフの記念グッズや革命家のファッション、ドストエフスキー『罪と罰』やカラコーゾフの病歴を記録したカルテから、「噂」・「無駄話」・「腹を割った雑談」、あるいはポリサードフの聖書からの引用の仕方（285 頁）のような、必ずしも文字資料として後世に残らなかったものまで含んでいる。こうしたアプローチ自体は、ポスト構造主義の影響下にある文化史研究では珍しくないが、新奇な史料に即して様々な推測が提示されていく過程に、読者はなにかアクロバティックな印象をもつだろう。たとえば、第七章で用いられているカラコーゾフとポリサードフの対話を記録した文書は、「おおむね役人のメモ」であって「不完全で隙間だらけ」だが、それでもヴァーホーヴェンは「残された情報源の継ぎはぎ」から対話の「雰囲気」を汲み取ろうとする（270-271 頁）。こうしたユニークな史料とアクロバティックな読解・推測によって、「党派に属さない論理」（128 頁）が、言うなれば「革命運動史」の枠外で作動する諸力の相関関係が明らかにされている。これらの点において本書は画期的な研究であり、様々な興味深い考察を引き出すことに成功している。

だが、それゆえにだろうか、本書を読んでいると「革命運動史」の「内部」があらためて気になってくるのだ。本書ではその性格上、同時代の「革命運動」についてほとんど言及がない。セルゲイ・ネチャーエフ（Сергей Геннадиевич Нечаев, 1847-1882）やヴェーラ・ザスーリチ（Вера Ивановна Засулич, 1849-1919）といった、帝政期ロシアの「革命運動史」を語る際に重きを置かれる人物たちは、ここでは積極的に後景にしりぞけられている。とはいえ、先にも述べたように、カラコーゾフは肯定・否定にかかわらずニヒリストや 1870 年代のナロードニキにとって注目の的であった。1869 年に革命を至上命題とする政治的綱領を執筆したネチャーエフも事件の熱にとり憑かれた一人である。当時 19 歳の青年は「カラコーゾフ主義」の話をむさぼるように聞き入り、事件の経緯が掲載された新聞『鐘』の借用を知人に頼んだという。のちに彼は次のように言い残したともされる、「我々の神聖な事業は 1866 年 4 月 4 日の朝にカラコーゾフによって築かれた。カラコーゾフ事件はプロローグとして見なければならない」、と。[8]

もちろん、このような点を中心にして、各国の歴史家・文学研究者からすでに様々な批判が本書に対して捧げられている。たとえば、十月革命前の革命家の「神話」を研究したマリーナ・モギリネルは、先行研究の調査不足を厳しく指摘しながら、ヴァーホーヴェンが「急進派の政治における「テク

[8] За сто лет (1800-1896): Сборник по истории политических и общественных движений в России / Сост. Вл. Бурцев при редакционном участии С. М. Кравчинского (Степняка). London: The Russian Free Press Fund, 1897. С. 137.

スト」と「リアリティ」の複雑な相関」への分析を軽視していると批判している。[9] ロシア史における急進派のテロリズムに詳しいスーザン・モリッシーは、カラコーゾフ事件が特権的に扱われた結果、本書では後世のテロリズムとの結びつきが見えづらくなっていると指摘している。[10] また、文学研究者の越野剛氏は、そもそも近代の後進国ロシアにおいて、なぜ近代世界初のテロリズムが可能になったのかについて、本書では説明が不十分であるとコメントしている。[11]

以上で軽く見たように、[12] 本書については多くの評言が提示されており、評者があらためて言及する余地は無いように思われる。ただし、ここでは第五章に関して気になった点を指摘したい。この章では、革命家が政治的な隠密行動を取る必要から目立つ服装や身振りを放棄して、変装をはじめる過程が叙述されている。評者が気になったのは、こういった「差異」に「仮面」をつける過程で切り開かれていったもうひとつの次元である。それは「スパイ」（あるいは挑発－扇動者 провокатор）の問題だ。帝政期ロシアの革命運動におけるテロリズムについて考える際、スパイの存在は無視できない。「人民の意志」派のセルゲイ・デガーエフ（Сергей Петрович Дегаев, 1857-1921）から社会革命党のエヴノ・アゼーフ（Евно Фишелевич Азеф, 1869-1918）に至るまで、歴史的な出来事となったテロリズムの背景には革命家／スパイの影がある。ヴァーホーヴェンの議論によれば、カラコーゾフ事件は「テロリスト」という新たな近代的な政治主体の出現を告げるものであったが、それと同時に「スパイ」という別の主体も構成したのではないか。都市の群衆のなかに、そして革命家／テロリストのネットワークのなかに紛れ込むこと――このような「周囲に溶けこむ能力」（215 頁）はコインの表裏である。カラコーゾフが「全体の核心を内にいだいた」奇人であるとすれば、このようにスパイの問題系をたぐってみることも可能だろう。その意味で、評者は本書のような議論を突きあわせながら、「革命運動史」の「内部」をいまいちど検討する余地があるように感じた。

本書には様々な図版が挿入されており、読者の便に供している。それゆえ、1866 年時のペテルブルグ市街の地図を付したほうが本書の内容理解にとって有益であったかもしれない。これは原著にも収録されていないが、当時の地図を俯瞰しながら本書を読んだほうが、事件の状況の想像がより容易であっただろう。また、カラコーゾフとラスコーリニコフの住まいや行動を照合することによって、フィクションと現実の同時並行性について別の発見があるかもしれない。これ以外にも、人

---

[9] *Могильнер М.* Claudia Verhoeven, The Odd Man Karakozov: Imperial Russia, Modernity, and the Birth of Terrorism (Ithaca and London: Cornell University Press, 2009). 248 pp. Bibliography, Index. ISBN: 978-0-8014-4652-8 // Ab Imperio. 2009. № 2. С. 368.

[10] Susan Morrissey, Terrorism, Modernity, and the Question of Origins, *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, Vol. 12, No. 1, 2011, p. 222.

[11] 越野剛「「史実」はいかに作り出されるか　クラウディア・ヴァーホーヴェン著、宮内悠介訳『最初のテロリスト　カラコーゾフ――ドストエフスキーに霊感を与えた男』」『週刊読書人』3345 号、2020 年 6 月 26 日。

[12] 本書に寄せられた英語・露語の書評に関しては、ロシアの歴史家オレーグ・ブドニツキーがまとめているので、詳しくはこちらも参照していただきたい。*Будницкий О. В.* Терроризм в российском освободительном движении: идеология, этика, психология (вторая половина XIX - начало XX в.). 2-е изд., доп. М.: РОССПЭН, 2016. С. 315-318.

名のささいな誤表記が目についた。たとえば、「スティーブン・P・フランク」（7 頁）はステファン・P・フランク（Stephen P. Frank）、「ブドニツスキー」（324 頁）はブドニツキー（Будницкий）であろう。そのほか「カルロ・ギンズバーグ」（7 頁）はカルロ・ギンズブルグ（Carlo Ginzburg）と表記したほうが日本の読書人にとって親切であっただろう。とはいえ、これらは本書の大きな瑕疵ではない。「革命運動史」研究への大きな貢献であるだけではなく、ロシア文化史のコンテクストにおいて政治的暴力の諸問題を考えるうえでも、本書は近年の注目すべき研究成果である。また、「謎解き・カラコーゾフ事件」とでも言うべき本書にはユニークな知的情報や考察が溢れており、読み物としても刺激的な一冊となっている。多くの読者に広くおすすめしたい。[13]

（たむら ふとし）

[13] ところで、本書の最大の「謎」は「訳者 宮内悠介」にあるかもしれない。SF からミステリーまで幅広いジャンルの小説の書き手である宮内氏を初めての翻訳へと駆り立てたものは何だろうか。おそらく、きっかけのひとつはドストエフスキーではないか。2016 年のインタビューにおいて、宮内氏は「一番好きな作家」としてドストエフスキーを挙げており、「私が理系から文転したきっかけの、いわば人生を変えた作家でもあります」と語っている。「作家の読書道 第 178 回：宮内悠介さん」［http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi178_miyauchi/20161116_5.html］2022 年 4 月 26 日閲覧。最新のインタビューにおいても、ドストエフスキーへの宮内氏の想いが変わっていないことを確認できる。「ドストエフスキー・アンケート 回答者 中島義道・東浩紀・宮内悠介（経過解説・齋須直人）」『ドストエーフスキイ広場』31 号、2022 年、177-178 頁参照。このように宮内氏に「霊感を与えた男」がドストエフスキーであったことを踏まえると、本書のキャッチーな邦題がなにか意味深いものに思われてきた。